私は、舞姫が私たちに教えていることについてレポートを書きます。なぜこのテーマを選んだかという点、この舞姫という文学作品にせつかく出会ったのに、ただ単になんとかおもしろかったという感じで終わらせたくないと思っていたし、また、表面的な部分だけでなく「なぜこの小説はつくられたのか、この小説は何を私たちに教えているのか」というような深い部分をこの機会に探ることで小説を深く読もうとする力を鍛えたいと思ったからです。さて、このテーマの結論として私が考えたのは、「決断を下す勇氣を持って。さもなければ他人がたどらせようとする道ばかりをたどるような受動的な人間となり、結局自分が大きな後悔をしてしまうことになる。」ということだと思います。こう考える根拠となることが二点あります。

まずその一点目ですが、教科書本文の序盤のほうの、「ああ、ブリンディシイの港を出でてより、はや二十日余りを経ぬ。世の常ならば生面の客にさえ交わりを結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習ひなるに、微ようにことよせて房の内にもみこもりて、同行の人にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭を悩ましたれば

なり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古跡にも心をとどめさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九回すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の影とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ず響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾たびとなく我が心を苦しむ。ああいかにしてかこの恨みをしようせん。もしほかの恨みなりせば、詩に詠じ歌に読める後は心地すがすがしくもなりなん。これのみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじ」という、豊太郎が非常に後悔をしていることです。何に豊太郎は後悔

をしているのかというと、この部分のすぐ後について「いで、その概略をつづりてみん。」とあってそのあとに、ドイツでのエリスとの出会いと、彼女と過ごした生活、そして豊太郎に欺かれたというショックによって精神的に回復不能なまでに傷ついた彼女の鮮明な様子が描かれていることから、エリスをとて傷つけてしまっ

たことを豊太郎は非常に後悔していると言える点です。豊太郎がエリスを傷つけてしまったという原因は何かというと、豊太郎がエリスに、自分は帰国するというようなことを一言も口にしておらず、にもかかわらず天方伯の「自分と一緒に帰国しないか」という誘いに対しては承知してしまったことです。このことを豊太郎本人か

らではなく、相沢から聞かされたエリスは、愛していた豊太郎に自分は今これほどまでに欺かれていたのかと思つて精神的に大きなショックを受けてしまったというわけです。ではなぜ、豊太郎は愛するエリスがいるにもかかわらず、そんなりと天方伯の誘いに承知してしまつたのでしょうか。その理由が結論の根拠の二点目でもあります。

その二点目は、「余が幼きころより長者の教えを守りて、学びの道をたどりしも、仕えの道を歩みしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にまどりのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を捨てて顧みぬほどの勇氣ありしに

あらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。」(教科書 p269の「から」行目)、「余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるがうれしさに怠らず学びしときより、官長の働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めしときまで、ただ所動的、機械的の人物になりて自ら悟らざりし」(教科書

p267の8から11行目)「余は恥を表さん。この答へはいち早く決断して言いしにあらず。余は己が信じて頼む心を生じた人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答への範囲をよくも量らず、直ちにうべなふことあり。」(教科書 p288の4から7行目)「貧しきが中にも楽しきは今の生活、エリスが愛。我が弱き心

には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。」(教科書 p287のウからウ行目)というこれらの部分から読み取れる豊太郎の性格です。これらの本文の内容から、豊太郎は周りの事柄を顧みずに自分で決断を下す勇気がなく、結局他人が引いたレールの上をただひたすら歩むような受動的な性格だったと言えます。だからこそ、エリスを愛しているにもかかわらず天方伯の誘いに対して、エリスと別れるか天方伯の誘いを断るかを決断する勇気がないためにそのまま天

方伯の誘いを受けてしまい、エリスを傷つけてしまうこととなったのです。その結果、自らも大きな後悔を背負うことになってしまったのです。

ここで今回のレポートのテーマの結論の根拠をまとめますと、「決断を下す勇気がないがために、豊太郎はエリスを傷つけてしまい、自らも大きな後悔をしてしまった」ということです。したがって以上のことから今回のレポートの結論として、「決断を下す勇気を

持つ。さもないければ他人がたどらせようとする道ばかりをたどるような受動的な人間となり、結局自分が大きな後悔をしてしまうことになる」ということが言えます。この結論に対して私は概ね共感できますが、自分で目的があつて決断したのなら他人がたどらせようとした道を歩んでいたとしても受動的な人間ではないと思うので、そこがこの結論とは少し違うなど感じました。

最後に、今回のレポートを書くにあたって、基本的に教科書の舞姫の本文を参考にしましたが、国語便覧やパソコンのインターネットを使って舞姫の作者である森鷗外の生い立ちや性格、また舞姫がつくられた時代なども考慮に入れられると、もう少し違う観点で舞姫が私たちに教えていることについて考えられたかと思

いました。

これでレポートを終わらせていただきます